

I. 発達障害児の早期発見・在宅療法に関する研究

〈A. 在宅医療総論〉

1. 在宅医療の現状に関する文献検索

—小児在宅人工換気を中心に—

榊原 洋一* 嶋下 重彦*

在宅医療という言葉から国民がいちばん最初に抱くイメージは、多分在宅医療の最大の対象者である寝た切り老人のイメージであろう。しかし、在宅医療という言葉は、すでに医療の全ての分野様々な意味で使われている。

我々は、早期在宅ケアに関する研究を開始するに当り「在宅医療」の定義をはっきりする必要があると考えた。そこで、これまでに「在宅医療」「在宅ケア」という言葉で語られる医療、ケアはどのようなものを包括しているのか文献的な調査を行なった。さらに小児在宅ケアにおいて特に近年注目されている「在宅呼吸管理」に関する研究に焦点をあて、これまでの研究成果に検討を加えた。以下にその調査結果について報告し、「在宅医療」「在宅ケア」の現状に関する問題点について考察を加えた。

対象・方法

対象とした文献は、1989年から1991年の3年間に医学中央雑誌に掲載された全ての「在宅」というキーワードを有する研究論文、総説論文ならびに学会発表の抄録と、厚生省委託研究の全ての報告書である。検索の方法は、医学中央

雑誌については、「在宅」をキーワードにコンピュータを使った文献検索システムで行なった。厚生省委託研究報告書は、これまでの報告書をすべて閲覧し、在宅医療・ケアに関する研究をすべて抜きだした。さらに、「在宅呼吸管理」についても同様の方法で検索した。

結 果

1) 医学中央雑誌検索による「在宅医療」研究調査

1989年から1991年の3年間に医学中央雑誌に掲載された「在宅」というキーワードを有する研究論文、学会報告抄録数は総計478件であった。なお、これはこの3年間に掲載された研究であって、実際にこの3年間に発表された全ての研究ではないことに留意しなければならない。478件を29のカテゴリーに分類し、各々の件数を示したのが図1である。一つの研究が2つ以上のカテゴリーに関わる場合には、当てはまるすべてのカテゴリーに加えた(例:末期癌老人の中心静脈栄養法→悪性腫瘍,老人(一般),栄養)。図から明かなように、単一カテゴリーとしては「栄養」に関する研究件数が最も多かつ

*東京大学医学部小児科

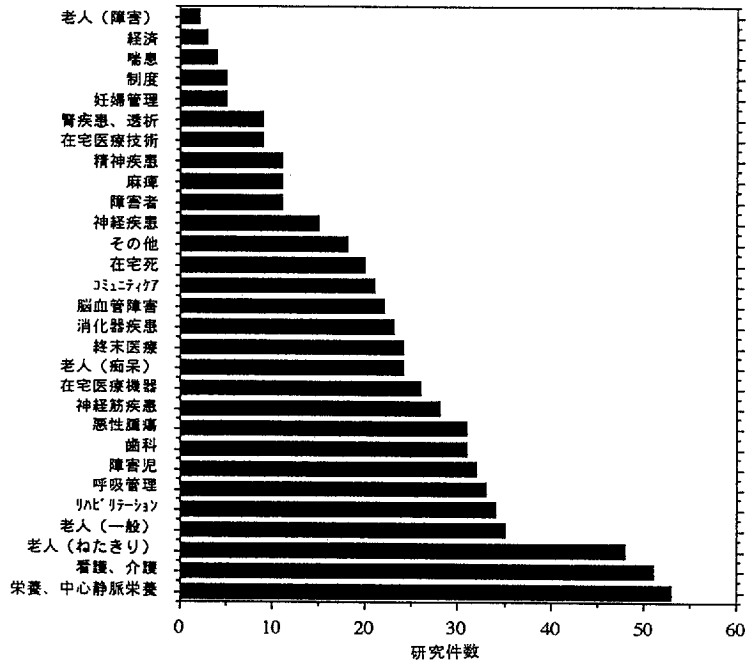


図1 医学中央雑誌(1989-1991)に収載された「在宅」を表題に含む研究論文、学会抄録のカテゴリ別の件数

た。ついで在宅看護、介護、寝た切り老人、リハビリテーション、在宅酸素療法・呼吸管理、在宅障害児と続いていた。老人に関する研究は便宜上4つのカテゴリーに分けた(寝た切り、痴呆、障害老人、一般)ため、実際には「在宅老人」に関する研究が最も多く全体の17%を占めていた。一方小児期の在宅に関する研究は独立カテゴリーとしては「在宅障害児」を独立させることができたのみであり、全体の5%(32件)にしか過ぎなかった。また、在宅医療の体制やその経済問題に関する研究は極めて少なく8件しか検索できなかった。

2) 厚生省委託研究費による「在宅医療」研究

厚生省委託研究費によるこれまでの「在宅医療」に関する研究をまとめたのが、表1である。調べられた範囲で一番古いものは、昭和50年度から3年間行なわれた「心身障害児の療育に関

する研究」である。表から分かるように、厚生省委託による「在宅医療」研究は障害児(者)、筋ジストロフィー、新生児、難病、呼吸不全の5つのカテゴリーに分けることができるように思われる。それぞれのカテゴリーに従って厚生省委託の「在宅」研究のテーマを分類し表1の右に示した。表から窺われるように厚生省委託である点を反映してか、制度やシステムに関する研究が多いが、その範囲は極めて広く、在宅医療の多様性を反映していた。

3) 在宅呼吸管理に関するこれまでの研究

在宅呼吸管理ないしは酸素療法に関する研究は、1989年から1991年の3年間で32件を見出すことができる。32件中18編は学会報告抄録であり、論文にまとめられたものは14件であった。表2にそれらの論文のタイトルを示した。14例中7件は慢性閉塞性呼吸器疾患や結核後遺症な

表1 診療科別在宅医療

診療科名	在宅医療内容, 対象疾患*
神経	脳卒中, 筋ジストロフィー, 片麻痺, パーキンソン病, スモン病, 頸髄損傷, 筋萎縮症, 脊髄小脳変性症, 中枢性低換気, 筋萎縮性側索硬化症
消化器	短腸症, 胃ガン, 小腸切除, ストーマ, 潰瘍性大腸炎, クロウン病, 膵炎, 上腸間膜動脈閉塞, 大腸ガン, 小腸潰瘍
呼吸器	慢性呼吸不全, 低肺機能, 肺炎, 肺ガン, 結核後遺症, 慢性膿胸
循環器	急性心筋梗塞開腹期, 原発性肺高血圧症
腎・泌尿器	透析, CAPD, 膀胱留置カテーテル
内分泌	糖尿病(在宅自己注射)
アレルギー	喘息, 慢性関節リウマチ
新生児・未熟児	在宅未熟児, 胎児モニター
産婦人科	妊婦モニター, 胎児在宅管理
歯科	在宅歯科治療
耳鼻科	下顎ガン
精神	痴呆(老人), 分裂病, アルツハイマー病, ダウン症候群

*医学中央雑誌に掲載されたタイトルから抜きだしたもの(1989-1991)

表2 在宅医療に関する厚生省(委託)研究

研究名	年度	在宅に関わる研究内容	カテゴリー*
①心身障害児の療育に関する研究	S50-52	心身障害児の在宅療育指導	①
②小児慢性疾患児の療育に関する研究	S53-54	在宅心身障害児の家族への療育指導 心身障害児の地域ケア 心身障害児の訪問相談サービス	① ① ①
③長期疾患療養児の養護・訓練・福祉に関する総合的研究	S55-57	重複障害児の家庭療育に関する研究	①
④小児慢性疾患の診断・治療・管理に関する研究	S58-60	小児糖尿病の治療法の社会適応に関する研究	
⑤新生児管理における諸問題の総合的研究	S61-63	NICU退院児のホームケアシステム	③
⑥新生児期・乳児期の生活管理のあり方に関する総合的研究	H1-3	新生児・乳児の在宅ケア	③
⑦小児医療共同研究	S63-H1	小児難病の在宅ケアに関する研究 在宅人工換気	③⑤ ④
⑧筋ジストロフィー症の療養に関する臨床および心理学的研究	S55-60	筋ジストロフィーの在宅療養	②
⑨筋ジストロフィー症の療養と看護に関する総合的研究	S61-H3	筋ジストロフィーの在宅看護	②
⑩新医療技術研究事業に係る厚生省科学研究費補助金による研究	S42-	在宅医療機器, 在宅呼吸療法モニター	④
⑪厚生省長寿科学総合研究	H3	痴呆老人の在宅療法	
⑫市町村母子保健活動の効率化に関する研究	H3	小児慢性特定疾患児の在宅ケア	③④
⑬特定疾患「呼吸不全」研究	S53-H3	在宅酸素療法, 人工換気	④
⑭特定疾患「難病のケアシステム」調査研究	S52-H3	在宅難病患者の看護, 在宅療養 在宅酸素療法, 在宅神経難病	⑤ ④
⑮シルバーサイエンス研究	S62	在宅老人健康管理	
⑯厚生省科学研究「腎不全医療研究事業」研究報告	H1-H2	家庭透析	
⑰特定疾患「スモン調査研究」班報告	S47-H3	在宅要介護スモン患者の問題点	

*カテゴリー ①障害児 ②筋ジストロフィー ③新生児, 未熟児 ④呼吸不全⑤難病

どの成人の呼吸障害に関する研究であり、小児の在宅人工換気に関するものは含まれていなかった。小児の在宅人工換気に関する研究は4件あったが、すべて学会報告の抄録であった。

さて厚生省委託研究の在宅医療に関する研究のうち在宅酸素療法と在宅人工換気に関するものをまとめたのが表3である。在宅酸素療法と呼吸管理に関する研究があるのは、厚生省特定疾患研究「呼吸不全」班、同じく「難病のケアシステム調査研究」班、さらに心身障害研究「新生児期、乳児期の生活管理のあり方に関する総合的研究」、「新生児管理における諸問題の総合的研究」「小児医療共同研究」「新医療技術研究事業に係る厚生省科学研究費補助金による研究」であった。「呼吸不全」と「新生児期・乳児期の生活管理のあり方に関する研究」および「新生児管理における諸問題の総合的研究」は、在宅酸素療法および在宅人工換気にかんする厚生省委託研究としてはもっとも大がかりな

ものであった。しかし、「呼吸不全」班の研究は慢性閉塞性肺疾患や結核後遺症が対象であり、おもに国立療養所が中心となった研究である。また「新生児期・乳児期の生活管理のありかたに関する研究」と「新生児管理における諸問題の総合的研究」は、おもにいわゆる未熟児あがりの在宅患者を対象とした研究であった。

考 察

結果で示したように、これまで在宅に関する研究は数多い。また在宅医療に関連する診療科、疾患の種類もきわめて多岐にわたっていた。極端に言えば病院や施設ではなく自宅で行う医療行為すべてを「在宅医療」と呼ぶことさえ可能かもしれない。しかし、そのように無前提に「在宅医療」を押し進めて行けば、日本の医療の骨組みである保険医療体制や、医療の質の保持の点で大きな問題が生じてくるであろう。今回の「在宅医療」に関する研究の内容から明らか

表3 在宅呼吸管理に関する研究論文、学会抄録の内容

1989年～1991年（3年間）

医学中央雑誌 収載 32件

18件：学会発表抄録

14件：論文

在宅睡眠呼吸モニター装置の開発と臨床応用

長期在宅酸素療法の適応基準

脊髄小脳変性症患者の在宅へ向けての援助

在宅人工呼吸器療法導入となった患者の生活指導

在宅老人医療学 気切をした寝たきり老人とのコミュニケーション

慢性呼吸不全の在宅管理

在宅公害患者（慢性閉塞性呼吸器疾患）の生活療養実態調査

呼吸不全とその対策 慢性呼吸不全の在宅療法について

原発性肺高血圧症の長期（在宅）酸素療法

肺結核後遺症による慢性呼吸不全例に対する用事在宅換気

在宅呼吸管理をめぐる最近の話題

呼吸不全患者の在宅療法と注意点（1, 2）

呼吸不全の在宅管理と将来の展望

小児に関するもの 4件（すべて抄録）

重度障害児の呼吸障害の病態と治療法の検討

重度障害児の在宅療法の問題点 人工換気と経鼻エアウェイ

在宅で体外式陰圧人工呼吸器を装着した患児の継続看護

先天性中枢性低換気症候群に対する在宅人工換気法の試み

かになったことは、様々な診療科で、様々な職種の人がそれぞれの立場から「在宅医療」について報告をしていることである。そのこと事態は、在宅医療の多様性を考える当然のことと思えるが、それぞれの「在宅医療」間の横のつながりについての調査や、在宅医療を支える制度、法律、医療経済などに関するものが少なく、これから在宅医療についての政策をつくる上で必要な情報が不十分と思われた。

厚生省の委託研究で行われた「在宅」についての研究は、医学中央雑誌に掲載された研究に比べて、直接施策に関連する内容のものが多かった。実態調査も多いが、時間的経済的制限のためか、研究者のいる施設や地域内での実態調査がほとんどで、全国レベルでの実態調査は少なかった。また研究班同士の横の連絡が十分とられていないため、ほぼ同一のテーマの研究が重複して行われているケースも見受けられた。さらに、厚生省の委託研究自身がデータベース化されておらず、これまでどの様な研究がなされてきたのか調べようとすれば、すべての報告書に目を通さなければならなかった。早急にデータベース化が望まれる所である。

人工換気に関する報告も、事例報告や一施設での経験をまとめたものが多かった。全国調査は、「呼吸不全」研究班のものと、「新生児・未熟児の生活管理のあり方に関する研究」のもの2つが見いだせた。しかし、「呼吸不全」班のものは調査票回収率が低いこと、他方は回答率は高いが、調査対象施設数が少ない(149施設)ことなど、全国のニーズを知るためには不十分と思われた。

すでに在宅医療体制は、在宅関連の保険医療の拡大や訪問看護体制など実際に制度化が進ん

でいる。しかし、今回の文献的研究で明らかになったように、その定義や需要について確定されていない部分が多い。今後、在宅医療体制を特殊な医療形態としてではなく、慢性疾患医療の一般的な形態と位置づけるためには、これまでの研究結果を総括した上で、在宅医療の包括する医療内容の定義、全国のニーズの調査、必要な財政、人的資源の算出などのプロセスが必要であると思われた。さらにその基本的な資料となるこれまでの研究の検索システムの整備も早急に行なう必要があると思われた。

文 献

- 1) 島田誠一, 玉井 晋, 船戸正久: 小児における在宅人工換気療法の試み. 脳と発達, 21: 557-562, 1989.
- 2) 島田誠一, 船戸正久: 在宅人工換気療法の実際とその問題点. NICU, 4: 93-98, 1991.
- 3) 小林啓子, 鈴木康之, 阪井裕一, 宮坂勝之: 小児在宅人工呼吸の検討. 人工呼吸, 7: 152-158, 1990.
- 4) 佃 篤彦, 藤田 委由, 細谷亮太, 船戸正久, 榊原洋一, 三宅捷太: 小児慢性特定疾患児の在宅ケアに関する研究. 厚生省心身障害研究「市町村母子保健活動の効率化に関する研究班報告書, p1-20, 1992.
- 5) 末次 勸, 佐賀 務: 長期人工呼吸療法に関する全国実態調査結果とわが国の在宅人工呼吸療法の現状と問題点について. 厚生省特定疾患呼吸不全調査研究班平成元年度調査研究報告書, p163-167, 1990.
- 6) 阪井裕一, 小林啓子, 宮坂勝之: 我が国の小児在宅人工呼吸の現状. 日胸疾会誌, 30: 1274-1279, 1992.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



在宅医療という言葉から国民がいちばん最初に抱くイメージは、多分在宅医療の最大の対象者である寝た切り老人のイメージであろう。しかし、在宅医療という言葉は、すでに医療の全ての分野様々な意味で使われている。

我々は、早期在宅ケアに関する研究を開始するに当り「在宅医療」の定義をはっきりする必要があると考えた。そこで、これまでに「在宅医療」「在宅ケア」という言葉で語られる医療、ケアはどのようなものを包括しているのか文献的な調査を行なった。さらに小児在宅ケアにおいて特に近年注目されている「在宅呼吸管理」に関する研究に焦点をあて、これまでの研究成果に検討を加えた。以下にその調査結果について報告し、「在宅医療」「在宅ケア」の現状に関する問題点について考察を加えた。